

これに云葉水より此縁を穿ぬるや
此端り阿達と申すれはさか小名と申す
侍も六七十騎縁船と目録に在りぬ
希小名をおしむ侍もいさうあそひと
縁船に思ふ類をふり阿くするれと
さくはくと斗の云葉也

一 せんーやう少介子ハ吉野山く忠信判官
司、きせさうと狩り一人孝子御孫と
子今至迄の云葉れと人々の忠信手柄ハ

此今の少介手柄右子まさ門くさうと
はくはくと云葉く少介ハ別意なる
不みく知くさう事ハさうなるぬと
うや此侍帯少介、下下ハを惣中一の侍
り、下下ハと不中ハ侍用ハ可立子
惣中ハ下下ハと中云葉子愧ハハ衆と思ふ
知く六七十人の侍をくくは覚悟
と合せ侍帯の下へ各息を御
ひは事

一 所帯此留ると秀吉とてりさゆ子は流し
 注及勝家討死と見えたりとて所馬と
 只一騎志志よりとやめら進さふと此と
 皆く是子婦を命より行きたる出り子と
 所の所帯へかるとりて小押解つて備へ
 たる人数也此不整道少くも人数の多
 少子と不整奇に進返程さるゝ大軍乃
 賊水のよをとりて是と立並さぬ物也と思召
 銃炮と所帯のめを射しと十挺とる候い

を銃銃炮さけ進は志をく一は討たふより
 衝云々桂とたつはる銃炮也此へ押立
 幾所人数二倍先上立成三倍めは物く
 是さり扱矢はよりあり一かハ銃炮討
 掛とこれ下知さり少介方も思ひ切り
 ころ武者ともさるゝ如葉一辰切山殿二辰め
 毛跡とさくふ子討死知とや此旗本も何
 やふく見え中いふより者とも二辰めとて
 少介方と毛跡討死は扱頭と所帯とこれハ

勝家預まをなす一少介預は後一と母は是を
少介をかりと事と所意一と少介をかん
一江州と事不科也

一勝家ハ少介討死し間子落延させ給ひ是
とは無難おくととこれ家城城若少
庄上ハ強人教意ちりきりせられハ城を大
きかり被不とふりり一先此城おとやとハ
思思おれと後所子とむるさ人教お一今
まいりよとやおの心通せんし一由ハ後絶

乃藥と上やよとて薬と二重に詰させか
きよは内を公辭り我狗の元並一と事
大平かろめ平此門くさハよとくかめ
させややおせ一とまは後事

一茶田又左馬の首を我城城前より府中へ
強父子共に入す也此城を茶田後家城分
道五里隔り中ハ江州の入口也又左馬
との分別子の秀吉をやくは是へきと
可な掛志也裏切とも怪しとく角とるを

出せ秀吉も此處是と云可也思ふに之を後吉
と云一師上もあやうくも命を思ふ人先陣
乃惣加ま入り銃炮之りりとせよとて子息
孫四郎及孫出せと云く小銃炮之りりして
いまやくと云お侍也

一 秀吉をまきと云い子さ一かひは城きま人師
先手の者通つと云ふ事なり惣加ま入りより
銃炮きまひ一くお惣加ま入り秀吉を
師境一先手此師人数三所并引と云せ

後をい不立一と云く只人数九に成りて皆
く志をに長よを免と云と下知一と云い
事志のまりて師馬の口九一人も云く
師馬下り此馬は先手十間并は隔て
只一騎と云く彼惣加ま入りと云く師馬と
ちら師馬を敵の内よりハ望む此馬下也
馬上を一騎也是を討を多詮事と討を
と銃炮大將共下知と云也

一 秀吉をちらくと云師馬を先手は師上

ざんを捕申一是を能器守也や見初り
た類う銃炮討ふくと云佐一うハ内子
は皆見志り事目たる人等一控違より
銃炮不可討とて壁下知を類也

一
秀吉あや表裏新く城の大手大門より
歩馬と素舟控へを折并矢倉より番元
高畠石見奥村助右衛門矢倉より是て
おり大門の戸をくを両方へ押起しき馬
と並よりは石入より中より番子もや歩馬の

おりさせ控ふ所は彼兩人歩馬口と云
くも兩人の者を内へ歩居一の者也
又左衛門及父子何の中なく帰城哉と
歩尋は成と知り兩人中上佐ハ何の中なく
父子せ小帰城は佐ハと中上くハは佐より
二人の者は佐よりく内トをハを間へ又左衛門及
者とも勝家級軍の時甚合におは討より
者も中上佐かと歩尋ありおれハを佐より
は危の内へは存は知いつる小塚原を歩

討死位はと中上へは去るを亦又去るは
其のそむる所存は知る處は又六人毛
巻合におは討死と中上は秀吉も心は
阿ふへとは思ひたりつ道とそれ
合戦も是と可分格あふ一不及是非
次第と所意也

一 又左妻の故の父子は出向是迄の世は目如度
さ又左妻の種中上はとくを心地と
と云ふき書院通り書入とせり一とふ

所子臺石かまはし人通り所入は所意は
先此内儀様へは目子かつと播磨のむき
息災と通可中作留あり又左傍の
所前の所存所へはと地もはぬを
つと左妻の故の父子又左妻の故の
向は成へは先中上は今部と合戦亭主
又左妻の故の世は知ると所意と
まは手と合戦の世は葉と中法は娘
播州より此中毛中左の一は知人仕

孫より名受く世切中誠心と能行く人
又た妻の成歩前之く不慈は目と受ふ
是迄の歩出を不慈子慈は目と能行く人
目如度は心のまは生女の男とて縁に此
上のめくたさは入る歩にまとの此阿い
とつとてしれ子秀吉は海より右に中上は
合義心はまににおまうせし年梅子又た妻の成
はうの中はくは生は此く庄に急中は留歩
益と此下もやく可は立は同を是より

専主雇可中と能依く肉に益如歩指番
より阿は此益は此かこしは能依は秀吉
歩意は此やめは生は此く可は下と能依は
是も生は人まに能やめは阿より中はと能
とくくもや能成は立は歩意は孫四郎成
も是子は能成は此依は生は人又た妻の成を
切者の事とて旨同道中はまは目如度
歸陣は此能寄は能を是は由はと
五二日も逗留可仕はと能依く人又た妻の成

勝家も基所の口まゝくはあ送ふ事

一 孫四郎及は盛孫四郎及は信俊のハ早々
 信俊は系作よ治をまや〜所〜り
 直名より款の事〜もね〜た〜
 さあ事ありても不苦まや〜と信
 佐渡事

一 又左衛門殿ハ子〜出立孫四郎及は信俊の
 信松子も系作の事〜秀吉先手の勝人
 教より毛治〜と成る事〜た〜地を

秀吉勝馬此次と可系なり但馬迄二
 人ま〜くから〜り以下子〜く〜
 ま〜りふ不可直中〜通〜て信俊〜と
 信俊又左衛門殿ハ秀吉先手より毛治又
 十四五所毛勝先上馬と信進孫家居城に
 駒とまや〜る也

一 勝家居城北〜庄上茶田又左衛門殿先
 信うれ城とより口と能留川〜下〜り
 毛川の橋少〜庄北石橋〜ハ是なり

渡の橋より十間行りけり新羅く所
瘡より橋を不渡しと福地子巻岩山
よりくは瘡はと山と又左馬の陣より
新羅く知りは籠かき先手の此人數もや
おはしたるは又左馬の陣下知りハ川をこふ
又左馬の陣下此人數は立橋の口といふ又左馬の陣
心掛り一番不可渡とや新羅人先手の
此人數も橋は口を不渡ま此手と云
乃人數もくかこめられを身も又巻岩

山より新羅く交り秀吉とや巻岩山
上布衣の陣意は軍兵を腰を糧と法
ひ中せとの所意もくは使番を派取
新羅を又左馬の陣へは所意もくは城
ためさ新羅もせめ可いと所意もくは後
合は事より後より焼より中以後より城
より知る者中上を勝家陣も不什と
新羅くは右に如中上大一人は銃炮の薬と
よきせ二重に法おくれはあ方をか

かゝる時勝家も自害せしむる哉歎か
 うき小火と入有るに上置しう板を切り
 其火をか布られし時と見え二重乃
 銃砲は葉もくさるひ天し由此引物
 とも四方ハ西より子らしし秀吉勝家
 名の是宿山へ去城より十町程も此處に
 して所はうらやと出さるこも子ら
 来りの殿至れ焼く候と勝家し
 又左妻の及何と此さ事さるる候と
 候と

勝家自害は仕いら又武略もくも勝家
 作哉とけ下と成い秀吉は此勝家武
 略の様子をいふ子と此意くを又左妻
 とのい勝家ししし由小火をか布るハ自
 害志し然様子見をか布る身ハ一先落し
 中や以流との勝家なり毎秀吉去勝家
 介の者う居城の天し由小火を掛し事
 我も人も城持程なる者天し由し事
 しも運の関かんうたれしし由也